



二の丸東大手門

2

三の丸土塁跡(十日町口付近)

最上家在城諸家中町割圖による三の丸 CG 合成 山形城



最上義光歴史館



最上義光の兜

最上義光歴史館(中の様子)

最上義光の和歌
冬来ぬとはや山里も霜寒み
くつに音ある庭のかよい路

※現代の片名遣いに直してあります。

57万石の大名 最上義光

斯波兼頼の子孫は、地域の名称をとって「最上氏」を名乗るようになりました。最上義光は山形城第11代城主です。出羽山形藩初代藩主であり、また、伊達政宗の叔父に当たります。

義光は、今から400年以上前の戦国時代に、山形を愛し、人を愛し、出羽国に平和と安定をもたらし、現在の山形の基礎を築きました。城下町や最上川交通路を整備し、庄内平野を開発するとともに、領内各地に優れた文化を移入するなど山形の発展に大きく貢献しました。

1600(慶長5)年には、天下分け目の関ヶ原の合戦と時を同じくして慶長出羽合戦が起こります。直江兼統率いる2万余の上杉軍に攻め入られましたが、関ヶ原の合戦で西軍敗北の知らせを受けて撤退する上杉軍と、伊達軍の援軍が加わった追撃する最上軍との戦いで、長谷堂から富神山周辺一帯は激戦となり、およそ2,200人が犠牲になったと言われます。

合戦直後の1602(慶長7)年には、功績により加増され57万石(実高は100万石とも言われる)を領する大名となり、徳川・豊臣を除き全国5位の石高となり、最上氏の全盛期を築き上げました。

義光は政治や経済の発展に尽くした偉業の他に、神仏を崇敬し寺社仏閣を大切にしていました。また、文化人としても高く評価され、連歌や優雅な和歌を残しています。

最上義光の偉業

- ①57万石を領する大名
- ②東日本随一の山形城の築城
- ③町人の経済活動・商工業が重視された巧みな城下町づくり
- ④最上川の三難所(暮点・三ヶ瀬・隼)の開削、酒田港の改修による舟運で、上方文化の移入に努力
- ⑤北楯大学に命じ、北楯大堰を作り、荒地地だった庄内平野を一大穀倉地帯に開発
- ⑥庄内と新庄、庄内と村山を結ぶ道路の改修
- ⑦紅花栽培を奨励し「最上紅花」のブランド化
- ⑧神仏を崇敬し多くの寺社仏閣の創設改修と保護



山形57万石の領土図

ミニ知識 3

大きな権力の象徴 「金箔瓦」

山形城の発掘調査で、当時中央政権の意向が働き、特に認められた大名にのみ使用が許可された大きな権力を象徴する「金箔瓦」が発見されています。

「金箔瓦」は織田信長が安土城で初めて使用し、その権力を受け継いだ豊臣秀吉が大阪城や肥前名護屋城などで用いていたものです。最上義光は、豊臣秀吉の朝鮮出兵の際に、肥前名護屋城に在陣していますが、この時、秀吉の築城した新しい城に影響を受けたと考えられます。

義光が三の丸まで広がる広大な城の拡張工事を行ったのは、庄内や秋田県沿岸南部まで収め、57万石といわれる領国を獲得する1600年関ヶ原合戦以降だと考えられています。



金箔瓦

4 最上義光歴史館を訪ねて

室町～安土桃山～江戸時代

山形城の基礎を造った 斯波兼頼



斯波兼頼肖像画

城下町や商業都市として、さらには県都として、その時々の人々の営みや思いを刻みながら、我が街は栄えてきました。そして、この山形城を築いた人が斯波兼頼です。

斯波兼頼は、源氏の名族足利氏の流れをくみ、八幡太郎の名で知られた源義家から11代目の子孫に当たります。1356(延文元)年に、兼頼は奥州大崎(現在の宮城県加美町)から、出羽の国を統括する室町幕府の役人として山形に入部しました。入部した翌年の延文2年、兼頼は山形を政治の拠点とするため、現在の霞城公園(二の丸)に山形城の築城を始めます。

岩波の石行寺にある『大般若経』の奥書によると、当時の山形では、長引く戦乱によって民衆が飢えや渴きを訴え、諸国に疫病が流行していました。兼頼は、山寺立石寺・六楯八幡神社・熊野神社などを修復再建し、宗教政策によって民の心の安定を図りました。また、縁組などを通し、山形・天童・寒河江を支配下に治めました。

晩年は僧となり、山形在住23年の64歳で亡くなりました。七日町「光明寺」に菩提寺があり、山形の発展を見守っていることでしょう。

義光はどんな人で、私たちの住む山形をどのように発展させていったのか、義光が残したのを見たり、館内の方にお話を聞いてみましょう。



解説

下図の屏風は、最上義光と上杉軍直江兼統とが戦った様子を表した「長谷堂合戦図屏風」で、江戸時代中期（300年ほど前）に描かれたとされています。「たかが小さな山城一つぐらい」と、上杉軍は3回ほど総攻撃をかけてきましたが、城は落ちません。攻めたり、攻められたり、激しい戦闘が約半月も続きます。（屏風右側の場面）そのうちに、関ヶ原の合戦で徳川方が勝ったという知らせが届き、「戦いも、もはやこれまで」と、上杉軍は囲みをといて退き、それを最上軍は追撃します。（屏風左側の場面）鉄の指揮棒を持って戦う最上義光、鉄砲隊に守られた直江兼統、その頃の両軍の有名な武将たちや、よろいを着ることもできない身分の低い侍たち……。細かく見ていくと、その頃の戦いの様子が、いろいろと想像できる屏風です。



↑長谷堂合戦図屏風（複製）

長谷堂城跡を探検してみよう!

長谷堂城づくりの工夫を探索してみましよう。

探検コース



①帯曲輪群

傾斜地に段々畑状に平坦面連なる防御施設です。城郭の北西部に位置しており、上杉軍の菅沢山直江本陣跡のちょうど正面に当たる場所につくられています。



三二知識 4

難攻不落の長谷堂城

長谷堂城は標高230m、麓から85m、南北670m、東西400mの小規模な独立丘陵につくられています。主郭である頂上から城内各所への見通しがよく、主郭を頂点とした統一的な指揮命令系統を組織できる抜群の名城です。

山腹には、曲輪や切岸、土塁、堀などの防御施設が効果的に配置されており、巧妙に敵の侵入を防ぐ構造となっています。山を登ってみると、直江上杉軍の侵攻を半月に渡り食い止めることのできた、いかに堅い城だったか実感できます。



慶長出羽合戦「長谷堂合戦」

今からおよそ400年ほど前、1600（慶長5）年の秋、大阪の豊臣と江戸の徳川を中心として、日本国中の大名を巻き込んだ天下分け目の戦い「関ヶ原の合戦」が起きました。

この時、豊臣五大老の一人上杉景勝の重臣、直江兼統は2万余りの軍勢を率いて、徳川方の最上義光を討とうと山形めがけて攻め入ってきました。守る最上軍は多く見積もっても1万足らずという劣勢でした。

直江軍は、まず白鷹山の北の畑谷城を全滅させ、続いて、長谷堂城に押し寄せました。城を守っていたのは志村伊豆守光安を主将とする最上の武士たちです。長谷堂城が落ちれば、山形も戦場になってしまいます。義光はこの城を守るために全力をあげて戦いました。親戚にあたる仙台の伊達政宗にも加勢を頼みました。関ヶ原の合戦で徳川方が勝ったという知らせが届き、「戦いもこれまで」と、上杉軍は囲みをといて退き「長谷堂合戦」は終了します。

この戦いで、直江軍1,580人、最上軍623人、伊達勢30人余人、計2,200人を超える人が命を落としたとされています。現存する最上義光の兜に残る弾痕は戦いのすさまじさを物語っています。



②土塁

敵の攻撃や侵入を防ぐための土手のことです。この土塁は城郭北側の峰筋に位置し、比較的防御施設の少ない八幡崎口から攻める敵を意識していると考えられます。



③曲輪

山の傾斜面を削って、平坦に造成された区画のことです。建物を構えて寝泊まりしたり、柵を立てて防備したりする機能を担っていたと考えられます。



④横矢掛り

敵に対して、側面から矢や鉄砲を放って攻撃ができるように、通路を屈曲させ、その両側に部隊を配備する曲輪を配置した防御施設です。



⑤虎口

曲輪などの各施設への出入口のことです。長谷堂城には様々な形の虎口があります。左の写真は山頂広場に通じるものです。



⑥二重横堀

下から攻め上がってくる敵兵を食い止めるためにつくられた堀と土塁です。



⑦切岸

人工的に斜面を削って造成した、崖状で急斜面の防御施設です。削った土砂を盛って平坦な曲輪をつくることもあります。

年(西暦)	城主	前(前封地)	後(転封地)
1356	斯波兼頼 最上義守	前(宮城・大崎から入部)	後(前封地)
1571	最上義光 家親・義俊	後(宮城・大崎から入部)	前(宮城・大崎から入部)
1622	鳥居忠政 忠信	後(宮城・大崎から入部)	前(宮城・大崎から入部)
1643	幕領	後(宮城・大崎から入部)	前(宮城・大崎から入部)
1644	幕領	後(宮城・大崎から入部)	前(宮城・大崎から入部)
1648	松平忠弘	後(宮城・大崎から入部)	前(宮城・大崎から入部)
1668	奥平昌能 昌章	後(宮城・大崎から入部)	前(宮城・大崎から入部)
1685	堀田正仲	後(宮城・大崎から入部)	前(宮城・大崎から入部)
1686	松平直矩	後(宮城・大崎から入部)	前(宮城・大崎から入部)
1692	松平忠弘 忠雅	後(宮城・大崎から入部)	前(宮城・大崎から入部)
1700	堀田正虎 正春・正亮	後(宮城・大崎から入部)	前(宮城・大崎から入部)
1746	松平乗祐	後(宮城・大崎から入部)	前(宮城・大崎から入部)
1764	幕領	後(宮城・大崎から入部)	前(宮城・大崎から入部)
1767	秋元涼朝・永朝 久朝・志朝	後(宮城・大崎から入部)	前(宮城・大崎から入部)
1845	水野忠精 忠弘	後(宮城・大崎から入部)	前(宮城・大崎から入部)

最上川舟運「三難所の開削」



上の写真は村山から大石田にかけての岩場で、左から、川底に基石を並べたように岩が突起する「基点」、川底に細い岩礁が三層をなす「三ヶ瀬」、岩礁の上を急流が走る「隼」です。地元の船頭にとっても、この川を下るのは命懸けでした。最上義光はこの三難所を開削し、内陸部から日本海への水上ルートを拓きました。

道路の改修

新庄-庄内
新庄-庄内間の道路
義光は、山形から最上郡を通り新庄から庄内に入る道路を改修しました。この道路は落石が多く「命知らずの街道」とも呼ばれる狭い難所で、馬1頭通るのがやっとでした。

村山-庄内
六十里越街道
六十里越街道は寒河江から出羽三山の一峰である湯殿山の山間を通るので、ひとたび風雨が強くなると危険極まりなく、積雪の季節は通行不能となっていました。
義光は、この道路を改修し、内陸と庄内の交流を促進しました。



初市



【初市の起源】
最上義光公治世の当時、山形には定期的市立つ市日町があり、それらの市の中心として十日町に「市神」が祀られました。
毎年1月10日に市神祭りとして十日町から七日町にかけて縁起物をはじめ様々なものを売る多くの露店が立ち並びようになったのが始まりと言われています。

三二知識 5

最上義光 武将パレード

平成25年10月13日、山形市の礎を築いた戦国武将最上義光の没後400年記念事業のメインイベントとして、よろいかぶとを身にまとい、武将や武者に扮した市民らが、山形市の目抜き通りを練り歩くパレードが行われました。
烏帽子姿の義光として現れた市川昭男市長ら一行は「エイ、エイ、オー、オー」と声を上げ、刀ややりを振り上げて行進しました。
大正時代から昭和39年まで『最上義光祭』という武者行列を行い偉業を称えていました。



経済の発展に
尽くした最上義光

最上義光は、羽州街道沿いに、七日町、十日町などの市日町、職人町をつくり、近江商人をはじめ外来商人の自由貿易を積極的に進め、その繁栄ぶりは東北最大とも言われていました。町づくりも、町人の経済活動・商工業が重視された巧みな城下町であったと言われています。山形藩は最上氏改易後も商業は大いに発展して江戸時代の山形を支える商業都市として繁栄しました。
義光は山形の経済の発展のために、内陸と庄内の交流を盛んにするとともに日本海を通じて領内の経済と文化を全国に結びつけました。その一つが、村山から大石田までの最上川「三難所」(基点・三ヶ瀬・隼)開削工事でした。本格的な整備が図られ、最上川舟運は交易の大動脈になっていきました。最上川舟運の開発で、上方との物資の交流は飛躍的に発展し、全国でも良質の染料として人気のあった「最上紅花」をはじめ、山形地方の特産である「青芋、米、大豆、小豆」などを上方に運び、上方からは、「木綿、塩、砂糖、お茶、小間物」などを運んできました。また、内陸と庄内を結ぶ「六十里越街道」や「新庄から庄内に抜ける道路」の改修や、大堰をつくらせ、荒れ地だった庄内平野の新田開発を進めました。



↑ 斯波兼頼の墓 (光明寺)



↑ 義光の墓 (光禅寺)



↑ 鳥居・水野の墓 (長源寺)

最上氏の栄光と影

57万石の大名になった最上氏にも多くの悲劇がありました。山形地方を統一するために、義光は兄弟で争わなければなりません。最愛の駒姫を豊臣秀吉の養子である秀次に仕えさせましたが、秀次の謀反の疑いで駒姫も処刑されました。そして、義光の死後は、跡継ぎ問題が続いたりしたため、1622(元和8)年、江戸幕府は最上57万石をとりつぶすことにしました。
仙台の伊達氏に対抗しながら山形地方を統一し、上杉軍に攻め込まれながらも出羽合戦(長谷堂城の戦い)を戦い抜き、置賜地方をのぞく山形県全部と秋田県の一部を領土とする大名になった最上義光の栄光は、義光・家親・義俊のわずか三代で国替えになってしまいました。
最上氏改易以降、山形は東北の軍事的要所として、鳥居氏や保科氏は近隣の外様大名に対する監視の役割を担っていたようですが、江戸幕府が安定すると、幕府から遠い存在の「大名赴任地」として、城主の交代が多く行われました。57万石のあった領土も、山形藩最後の殿様である水野氏の時には5万石まで縮小しました。

三二知識 6

駒姫と専称寺

最上義光の二女駒姫は東国一の美女と言われ、豊臣秀吉の息子秀次に召されて上洛しました。しかし、まもなく、謀反の疑いで秀次が切腹することになり、京についたばかりの駒姫も、他の側室と一緒に京都の三条ヶ原で、15歳の若さで処刑されてしまいます。
はかなく散った駒姫の死を深く悲しんだ義光は、故郷山形に帰るや、天童(高掬)にあった専称寺を山形に移築し、菩提寺として篤くその霊を弔いました。



↑ 専称寺